

1. 趣旨

青少年教育施設のボランティアの役割を理解し、必要な知識・技能を習得する。自然の中で活動する楽しさを味わい、仲間と協働した学びあいから、ボランティア活動に対する意欲を高め、社会に貢献できる人材を育成する。

2. 事業の概要

2-1. 第1回ボランティア養成研修

(1) 期日 令和4年6月4日(土)～5日(日)

(2) ①参加者 21人 (新規ボランティア 14名、法人ボランティア7名)

②内訳 高校生2名、大学生19名

(3) 日程

6月4日(土)		6月5日(日)	
10:20 受付	新規ボランティア	9:00 「安全管理Ⅰ 救急救命講習」	講師：上伊那広域連合消防本部高遠消防署 職員
10:40 開会式		11:00 「安全管理Ⅱ 感染症予防と対策」	
10:50 「青少年施設の現状と運営」 講師：国立信州高遠青少年自然の家 所長 梅津孝一		講師：株式会社大塚製薬工場専任課長薬剤師 小林繁	
	法人ボラ	9:00 「ボランティア交流会」	講師：ボランティア養成研修企画委員 (法人ボランティア)
12:30 「ボランティア活動の技術Ⅰ」		13:10 「青少年教育施設におけるボランティアの役割」	講師：国立信州高遠青少年自然の家 ボランティアコーディネーター ボランティア養成研修企画委員 (法人ボランティア)
14:30 「ボランティア活動の意義」		15:20 閉会式	
16:00 「青少年教育」			
18:50 「ボランティア活動の技術Ⅱ」 講師：公益財団法人キープ協会環境教育事業部 副部長 関根健吾			

(4) 企画運営のポイント

- ・新規ボランティアと法人ボランティアが交流する場を設けることで、新規ボランティアに対して今後のボランティア活動への意欲を喚起する機会とする。
- ・法人ボランティアによる企画委員を設置し、企画運営に携わることで、法人ボランティアとしての自覚を高め、ボランティアに必要な知識・技能を磨く機会とする。

(5) 参加者の声と主な活動

- ・失敗体験と成功体験のバランスの大切さのお話しは心に残りました。自分自身もっと挑戦して失敗体験をしようと思いました。(青少年教育施設の現状と運営)
- ・1つのフィールドで多くの活動に触れることができました。ヤマネの巣作りは最初完成形が想像できませんでしたが、班のみんなが作っていく中でどんどんアイデアを出してくれたので、こだわりの巣が完成しました。(ボランティア活動の技術)

・漠然と見ていた「ボランティア」が自分の中でより明確になりました。目的意識をもって活動に参加することが大切だということ学びました。（ボランティア活動の意義）

・子どもの身体性を育んだり安全教育の側面があるといった自然体験の役割が分かったので、自分も含めて自然体験をもっとしたいし、していくべきだと思った。（青少年教育）

・他のボランティアの視点や考えていることを改めて言語化して話ができてももしろかったし、考えの幅が広がったように思う。（ボランティア交流会）

・色を見つける活動が新鮮で面白かったです。集まったパレットを見ると、様々な色で出来上がっており、高遠の自然の豊かさに気づかされました。班の人たちとたくさんコミュニケーションをとることができました。（青少年教育施設におけるボランティアの役割）

開会式 アイスブレイク



ボランティア活動の技術



青少年教育、ボランティア活動の意義



安全管理



ボランティア交流会



青少年教育施設におけるボランティアの役割



(6) 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

事業全体を通して 満足：19名（90.5%） やや満足：1名 やや不満：1名

(2) 成果

- ・昨年は県内からの参加者のみだったが、今年度は近隣の県からの参加者も集まった。また昨年に引き続き、高校生の参加があった。
- ・例年、女性の参加者が多い中で、今年度は男性の参加者が9名と半数近くを占めることになった。
- ・新規ボランティアのみならず現役ボランティアについても参加可能にすることで、現役ボランティアがこれまでの活動を見直す機会となり、今後の活動を考える良い機会となった。

(3) 課題

- ・「やや不満」と回答した参加者から「もっと自然体験を多くできると思っていた」との意見があった。体験活動について、講師とプログラム内容の打合せを行う必要がある。
- ・新型コロナウイルス感染症が継続している影響もあり、参加者が昨年に比べて6割程度にとどまった。大学や高校に直接出向き、担当者と直接話をするなど広報のやり方を検討する必要がある。

2-2. 第2回ボランティア養成研修

(1)期日 令和4年10月29日(土)～30日(日)

(2)①参加者 10人 (新規ボランティア)

②内訳 高校生5名、大学生4名、社会人1名

(3)日程

10月29日(土)		10月30日(日)	
10:00	受付	9:00	「子どもたちを守る知識を身につけよう① 危険な動植物・ファーストエイド」(安全管理) 講師：国立信州高遠青少年自然の家 所長・職員
10:30	開会式	10:00	「子どもたちを守る知識を身につけよう② 救命救急講習」(安全管理) 講師：国立信州高遠青少年自然の家 応急手当普及員
10:50	「自然の家について知ろう」(青少年施設の現状と運営) 講師：国立信州高遠青少年自然の家 所長	12:50	「信州高遠自然の家のボランティアについて学ぼう」(青少年教育施設におけるボランティア活動) 講師：ボランティア養成研修企画委員 (法人ボランティア)
12:30	「子どもたちの今を知ろう」(青少年教育) 講師：国立信州高遠青少年自然の家 職員	15:10	閉会式
14:30	「アイスブレイクについて知ろう」(ボランティア活動の技術Ⅰ) 講師：ボランティア養成研修企画委員 (法人ボランティア)		
15:30	「野外炊飯をやってみよう」(ボランティア活動の技術Ⅱ) 講師：国立信州高遠青少年自然の家 職員		
19:00	「ボランティアってなんだろう」(ボランティア活動の意義) 講師：国立信州高遠青少年自然の家ボランティアコーディネーター ボランティア養成研修企画委員 (法人ボランティア)		

(4) 企画運営のポイント

・法人ボランティアによる企画委員を設置し、企画運営に携わってもらうことで、法人ボランティアとしての自覚を高め、ボランティアに必要な知識・技能を磨く機会とする。

(5) 参加者の声と主な活動

- ・自分より下の年齢の子達の現状が知れたし、ひとつの行動にしても色々な見方ができるんだと思った。(青少年教育)
- ・企画委員の方が面白いアイスブレイクを沢山考えてくださって仲間たちとの絆が深まってよかった。(ボランティア活動の技術Ⅰ)
- ・薪のくべ方や野菜を切る際のコツなどを、前もって資料で共有されていて、現場で細かな指導もしていただけたので、学びやすく、身につけやすかったです。(ボランティア活動の技術Ⅱ)
- ・色々な人のボランティアに対する思いや、姿勢、実際の動きを見たいという思いで、参加させていただいたので、お話をじっくり聞く時間があって嬉しかったです。年齢や所属などが違うみなさんのお話は、興味深く、一緒に活動して、その思いがどのように行動に反映されていくのかみたいと思いました。(ボランティア活動の意義)
- ・木に触れたり、テントを立てたり、自然に触れることが出来たので良かった。(青少年教育施設におけるボランティアの役割)
- ・直接言及されなくとも、高遠のフィールドの良さや、ボランティアのみなさんの良さを、じわじわと知っていくような感じがとても良かったです。(全体を通して)

青少年教育施設の現状と運営



青少年教育



ボランティア活動の技術 I (アイスブレイク)



ボランティア活動の技術 II (野外炊飯)



ボランティア活動の意義



安全管理



青少年教育施設におけるボランティアの役割



閉会式



(6) 成果と課題

(1)参加者アンケート結果 アンケート回収率 80%

事業全体を通して 満足: 6名 (75%) やや満足: 2名

(2)成果

- ・野外炊飯やアイスブレイクといった、実際の事業で法人ボランティアに任せることが多いプログラムを内容に入れることで、実態に沿った内容の研修とすることができた。
- ・広報について、学校等へチラシを送付するだけでなく現役ボランティアの協力を得て、大学内やSNSでの広報を行った。また、研修支援で当施設を利用してくださった学校に新たにチラシを送付するなど、広報の幅を広げることができた。

(3)課題

- ・地元の大学生が法人ボランティアの多くを占める中、研修が地元大学の大学祭の日程と重なっており、研修への参加を希望していたが、参加を見送る人も多くいた。次年度の日程を決める際には、地元大学の行事等を考慮して決める必要がある。
- ・今回はうまく外部講師の都合がつかず、多くのプログラムを施設職員が講師として実施した。年度の早い日程で、外部講師の都合を確認し、講師の確保が必要である。

3. 事業を2回実施したことの成果と課題

(1)成果

- ・年度内に2回研修が行われることで、1回目に都合が合わず参加できなかった学生や、先にボランティアになった人の知人を参加者として迎えることができた。

・現役ボランティア（企画委員）のプログラム企画運営の機会が増え、ボランティアの資質向上につながった。

(2)課題

・参加者について、多くは特定の大学に偏っており、その大学の都合で参加者の増減が著しく変化する。次年度以降は、広報の幅を広げて直接学校を訪問し、広報をする必要がある。

・10月開催時には現役ボランティアは参加者としなかったが、グループワークの様子を通して、新規参加者だけではなかなか活発な意見交換が行われにくいように感じた。ファシリテーター的立場で既ボランティアの参加があると、より深い交流が行われるのではないかと考える。

(3)その他

・現役ボランティア同士でも、なかなか顔を合わせる機会は少なく、横のつながりが希薄であるように感じる。また、ボランティアによって経験の差もかなりある。そのため、ボランティア養成研修は、新規ボランティア獲得の場としてだけでなく、現役ボランティア同士の交流の場、資質向上の場としての一面をもたせることも重要な役割であると考えます。